

## 倫理的<sup>1)</sup> 自伝文学についての覚え書き

- ロワの自伝『あがなえし遥かな時』をめぐる -

真 田 桂 子

### I . ガブリエル・ロワと自伝

1994年フランスで行なわれた『フランス語圏における自伝文学』と題された国際会議で、ロワ研究の第一人者であるF.リカールは、ガブリエル・ロワ<sup>2)</sup>の自伝について次のように述べている。

ロワの文学は単なるケベック文学やカナダ文学の枠にとどまらず、自伝文学に関心をもつあらゆる研究者にとって、極めて興味深い研究対象となりうるだろう<sup>3)</sup>。

実際、ロワの死後に出版された自伝『絶望と魅惑』(1984) *La détresse et l'enchantement*は、ロワ文学の最高峰をなす作品として、また自伝文学の傑作として批評家から高い評価を勝ち得ている。リカールはまた、ロワの自伝が生前に書かれたすべての作品に及ぼす影響について次のような指摘も行なっている。

ロワの自伝のもつ文学的価値が十分に認められているとは言え、死後に出版されたこの『絶望と魅惑』が、生前に著わされたすべての作品を新たな光で照らし出す力を持っていることは、それほど注目されてはいない。作家の最後の作品となったこの自伝には、ロワの全作品を貫くテーマや形式的配慮がもっとも集約的に表現されているというだけでなく、小説を中心とするすべての作品に秘められていた意図がこの自伝によってはじめて明らかになるのである。おそらく自伝こそ、作家にとって極めて本質的な意味をもつ、固有の美的な文学的追求めの到達点であったのだ<sup>4)</sup>。

このようにリカールは、ロワの文学において、自伝というジャンルがしめる重要性とその究極的な意味について言及している。

ガブリエル・ロワは、その死後に出版された『絶望と魅惑』、その続編にあたる『あがなえし逢かな時』 *Le Temps qui m'a manqué* (1997)の二つの自伝をはじめ、生前には、いわゆる自伝的な小説を数多く発表した。リカールが指摘するように、ロワがその文学をとおして「自伝」というジャンルに拘泥しつづけたことは明らかである。しかしロワはなぜ、それほどまでに「自伝」にこだわらなければならなかったのか。

ロワの処女作であり出世作となった『つかの間の幸福』 *Le Bonheur d'occasion* (1945)は、三人称で書かれた社会派の小説で、後年ロワがひたっていく私的で親密な自伝的な作風とはおよそ正反対のものだった。この作品はケベック文学に一時代を画し、大ベストセラーとなった。しかしその後、ロワは同様の作風を待ち望む批評家や世間に背をむけ、センセーショナルな処女作とは対照的な自伝的な作品を次々に発表していくのである。この作風の劇的な転向は、その死後十数年を経過した今日でも、この作家をめぐる大きな謎の一つとして論議が絶えない。いずれにせよこの事実一つをとってみても、ロワの文学において「自伝」が極めて重要な意味を担っていることが明らかになるのである。

## II. ジャンルとしての自伝

G. ギュスドルフは歴史的な文脈における自伝の発生を明らかにし、17世紀から18世紀にかけて、神との関係が断ち切れたところで「個人」が出現し、新しい西欧的「自我」が確立してきたことと軌を一にして、自伝というジャンルが興隆してきた事実を指摘した<sup>5)</sup>。またPh. ルジュンヌが、自伝を何よりも、作者、語り手、登場人物の同一性を前提とする、書き手と読み手の間にむすばれた契約的なジャンルであると定義したことはよく知られている<sup>6)</sup>。すでに古典となってしまった感すらあるルジュンヌの「自伝契約」は、さまざまな論議をよびながらも、今日まで、自伝というジャンルを考える上で無視できない指標として言及されてきた。

ロワの自伝について考察するまえに、ルジュンヌの自伝の定義および自伝の研究に関する見解を中心に、ジャンルとしての自伝がはらむ諸問題と特徴について大まかにまとめれば、次のような点が指摘されるであろう。

### (1) 自伝をめぐる諸問題

#### ① 「真正さ」について

「自己が自己をかたる物語」として単純に片づけてしまえそうな自伝というジャンルは、実際には極めて複雑でとらえがたいものである。ルジュンヌは自伝を定義するにあたって、小説や日記など他のジャンルとの峻別を試みようとしてしているが、それは必ずしも明確ではない。例えば自伝と小説との違いは、作者、語り手、主人公の三位一体の同一性が契約として明言さ

れているか否か、すなわちテキストの外部での契約的な要件のみによるわけで、作品の内実にかかわることではない。しかしその違いによって、一方は比較の実証性の高い作品として分類され、もう一方はあくまで虚構（フィクション）として分類されることになる。しかし、「小説は自伝よりもっと真実である」という常套句に象徴されるように、自伝としての形式をそなえているからといって、「真実」により近いと断言することなどできるだろうか。

またルジュンヌが指摘しているように、ある意味で「自伝」ほど無理解や偏見にさらされてきた文学ジャンルはないかもしれない。それは、すでに述べた「真正さ」、すなわち事実への「誠実さ」を前提とする自伝が逆説的にかかえる曖昧さによると言えるかもしれない。いずれにせよ、自伝はその「真実らしさ」のゆえに、むしろ信憑性の低い記録的な文学として、詩や小説に比べ芸術性の低い安易なジャンルとして、どちらかと言えば軽視されてきた傾向にあると言えるだろう。

## ② なぜ自伝を書くのか

「自伝」というジャンルを考える上で、人を自伝の執筆に駆り立てるのはいったい何であるのか、という動機づけの問題を避けてとおることはできない。例えばよく指摘されるように、ルソーの『告白』において顕著にみられるのは自己正当化への欲求であろう。また、回想録などをものにしたいわゆる著名人の作品に頻繁にみられるのは、自分の人生を首尾一貫したものとして再構成し、後世に価値あるものとして残そうとする、自己の人生の美化および理想化への欲求であろう。あるいは、ブルーストの『失われた時を求めて』において端的に表れているように、自己というもののあくなき探究こそが、人を「自伝」の執筆へとむかわせるのかもしれない。ここですべてを列挙することはできないが、動機として顕著に見受けられるのは、無秩序で過剰な生に統一性と意味を与えようとする欲求であり、さらに言えば自己を見出し、自己を再構築し創造しようとする欲求であろう。またもう一方においては、純粋に過去を蘇らせることへの快樂が大きな要因として働いているといえよう。

## ③ 自己と時間：古典的な自伝をめぐる二つの軸

いずれにせよ、これまでの自伝文学に関する考察をさらに簡潔に整理するならば、自伝とはすなわち、自己をめぐる探究であり、また時間をさかのぼろうとする試みである。これまでの自伝は、あくまでこの二つの主要な軸にそって探究され解釈されてきたといえよう<sup>7)</sup>。

## ④ アイデンティティの構築の場としての自伝

さらに今日注目すべきこととして、20世紀終盤のポストコロニアルの潮流において、いわゆる移民作家たちの多くがさまざまな形の自伝的な作品によってアイデンティティの模索を試み

るなか、「自伝」という文学的ジャンルは、単なる個人の自己の探究という実存的な意味合いを超えた、文化論的な枠組みのなかでとらえ直す必要にせまられている。すなわち、民族や言語、文化や国家といった境界のはざままで揺れ動き、その浮遊感のなかでアイデンティティの再構築を模索する移民作家の文学的な試みは、同時に新しいアイデンティティを模索する社会的、文化的な動きとも成りえているのである<sup>8)</sup>。

こうして、自伝そのものが多義的であいまいなものとなっていくなかで、その関心はますます高まっているのである。おそらく自伝文学が生まれたとされる18世紀以来、今日ほど、自伝というジャンルに対して関心が高まっている時代はないといえるかもしれない。

### Ⅲ．他者にむかう自伝

では、これまでに明らかにされた自伝のスタイルと照らし合わせたとき、ロワの自伝および自伝的な作品にはどのような独自性があるといえるだろうか。

#### (1) 「現在」の投影物としての「過去」

ルジュヌヌがあげている自伝を他のジャンルから分かつ最も目だった特徴の一つは、個人の歴史を語る物語である自伝が、一般的には時間の順序にしたがって年代的に構築されているという点にある。しかし、ロワの自伝および自伝的作品において、この点は必ずしも厳密に守られてはいない。ロワの作品において、語られる出来事や逸話はどちらかといえば時間軸をはみだし、作者の追憶のイメージーションの羽ばたきにまかせて自在に語られているのである。

例えば、自伝的小説とされる『デッシャンボー通り』*Rue Deschambault* (1955)は、作者の思春期までの成長を描き、その間の逸話を集めた中短編から成るが、決して年代順にならべられているのではなく、まるで「作者の成長に決定的な影響を与えた印象的な場面を思いつくがままにかきつらねた<sup>9)</sup>」ような並列的な構成をとっている。さらに自伝『絶望と魅惑』においても、過去を追想する一つの時間の流れのなかに、現在の作者の意識が自在に介入するなど、時間の単線的な軸が尊重されているとはいいたい。

リカールはまた、ロワの自伝的な作品は過去を回想することに重点があるのではなく、むしろひそやかにそれを執筆している作家の現在につながっている<sup>10)</sup>とする興味深い指摘をおこなっている。

#### (2) 「他者」を迂回する「自己」

さらに、ロワの自伝的作品の特徴として際立ったものに、その作品に登場する「他者」の存

在の重要性がある。ルジュンヌがG. ジュネットの用語を援用しつつ自伝の形態について詳細に分類したことは周知の事実である<sup>11)</sup>。それに拠れば、いわゆる古典的な自伝の形態とは、語り手と主人公の緊密な一体感を基盤とする「自己物語世界的」なものである。しかしロワの自伝は、それとは程遠く、第三者、すなわち他者について語る「異質物語世界的」な要素を多分に含んだ、自伝としては極めて異例のものであることが指摘される。

例えば、さきにあげたロワの自伝的小説『デッシャンボー通り』には、18の中短編が収められている。それらの多くは、異邦人や移民など、様々な意味において疎外された少数派に属する人々についての物語である。いずれの物語においても、ロワの他我を彷彿とさせるクリステーナが語り手として登場するが、主人公というより、あくまで登場人物の一人としてそれらの「他者」をえがく物語に関わり、物語をつなぐ語り部のような役割を担っている。すでに別の機会に論じたが<sup>12)</sup>、ロワの自伝的な作品における「他者」の優位は、形式上の問題を超越テーマそのものと深くむすびついていると思われる。ロワの描く「他者」は、しばしば、それこそが「自己」を反映するものとして立ち表れているのである。

いずれにせよ、本来自分自身を対象として「自己」を語るジャンルであるはずの「自伝」において、ロワは「他者」を迂回しながら「自己」を語ろうとするのである。

このようにロワの自伝においては、「時間」と「自己」の二つの軸へのかかわりは、どちらもこれまでの自伝のスタイルとは大きく異なる独自の様相を呈している。

#### Ⅳ．ロワとレヴィナス - 隔たりと他者 -

ロワの自伝をこれまでの自伝のスタイルから分かつのは、そこに顕著にあらわれる「他者」の存在の大きさに他ならない。なぜロワは、あえて「自伝」という形式において「他者」を描かなければならなかったのだろうか。それは、「他者」というもの、あるいは「他者」とのつながりということに対する根本的な認識の問題と不可分であるように思われる。

この問題を考えるにあたっては、最後の作品となった遺作『あがなえし遙かな時』のなかに、ロワ自身のいくつかの示唆に富む述懐を見いだすことができるかもしれない。

『あがなえし遙かな時』は、それを執筆途中で作家が逝去し未完成のまま残された草稿を、編集者であったリカールが手を加えて整え、作家の死後十数年の後ようやく出版されたロワの自伝である。大著『絶望と魅惑』の続編にあたるが、前作とは対照的にきわめて短い集約的な作品である。もちろん作家の死による中断という事情によるが、しかしこの作品には、この小説家の人生を決定づけた究極的な出来事が『絶望と魅惑』を補うかたちできわめて印象的に語られているのである。

(1) 母と娘

伝記『ガブリエル・ロワ』においてリカールが看破したように、「どの幸福をとってみても、そこには常にある種の苦々しさがつきまとっていた<sup>13)</sup>」この作家の人生において、最も究極的な出来事とは、まぎれもなく思いがけずにやってきた母親の死であった。そして、その死後にはじめて訪れた突き刺すような認識と後悔、すなわち自分は結局母親を見捨てたのだという取り返しのつかない思いであり、その償いも待たず母親は逝ってしまったのだという身をやくような悔恨ではなかったか。

ここでは大まかに触れることしかできないが、母親との関係を中心にロワの生涯をふりかえってみよう。ロワはマニトバのフランス系の町サン・ボニファスに生まれ、貧困や少数派であることに由来するさまざまな悲哀を味わいながら育った。放浪癖をもち、マニトバに定住した後は不遇のなかに晩年を過ごし、家族を残し早世してしまった父親に代わって、貧困や疎外された状況と苦闘し、多くの子供を抱えたくましく家庭を支え続けた母親は、ロワの人生に大きな影響を与えた。また陽気で天性の語り部の才能をもっていた母親から、ロワは多くのものを引き継いでいる。そしてロワは、その作品を通し飽くことなく母親の姿を描きつづけた。ロワが作家になる大きなきっかけをつかんだのは、郷里マニトバのサン・ボニファスを飛び出したヨーロッパでの二年余りにわたる彷徨の旅のさなかにであった。当初は演劇の勉強をするという目的のもとに企図されたこの留学は、作家自身が認めているように芸術や創作そのものの意味を問いかける旅となり、イギリスの片田舎で、結局ロワは演劇ではなく小説家となることを選び、しかも「祖先の言葉、自らの出自の言葉」<sup>14)</sup>であるフランス語に与して創作をおこなっていくことを決意する。

しかしこのヨーロッパへの出奔は、当時(1930年代)ロワが属していた階級の娘がとる行為としてはかなり突飛なものであり、しかもロワの母親に大きな犠牲を強いるものであった。その当時、郷里のサン・ボニファスで小学校の教師をしていたロワは、他の兄弟がすべて家をはなれ、年老いた母親と精神的な障害をもつ姉クレマンスの世話をしなければならない立場にあった。残される母親と姉との生活に最低限の配慮をほどこしながらも、安定した職業と当然と見なされた家族への責任を放棄して、ロワは情熱がおもむくがままに、家族の反対を押し切り、息づまるような郷里の小さな町を離れヨーロッパへの出立を決意する。自伝『絶望と魅惑』には、サン・ボニファスでの幼少時代からヨーロッパへの出奔までが第一部として、またヨーロッパでの二年間の留学の日々が第二部において描かれている。

『絶望と魅惑』において、ヨーロッパへの出奔に際しての母親との軋轢は、意外にも淡々とふれられているにすぎない。様々なしがらみを振り切ってヨーロッパへ旅立とうとする娘と残されることになる母親との複雑で微妙な心の揺れは、むしろ自伝的小説『アルタモンへの道』*La Route d'Altamont* (1966)においてみごとに描かれている。晩年に書かれたこの小説には、口

ワがヨーロッパに旅立つことによって取り残された母親が味わったほんとうの悲哀を、作家が後年になってはじめて思い知ったことへの悔悟の念がにじみでているのである。

母はその後、急速に衰えていった。そして病気でこの世を去った。しかしおそらく、多くの人がそうであるように、結局は悲しみのために死んだのではなかったか<sup>15)</sup>。

## （２）隔たりと他者

ロワは1939年ヨーロッパから帰国した後、故郷のサン・ポニファスには帰らず、モンリオールでジャーナリストとして身を立てる。カナダの各地を旅し、「カナダの人々」と題されたルポルタージュを手がけ、様々な移民について取材する一方、1945年に発表され大ベストセラーとなる小説『つかの間の幸福』をひそかに執筆している。ロワの母親はこの成功を見とどけることなく、その直前1943年に急逝する。

『あがなえし遙かな時』は、この母親の急逝の報を受け、夜汽車で故郷にかけつける場面を回想することからはじまる。当時のロワにはまだ経済的な余裕がなく、急な旅の出費に下宿の仲間や主人に金銭的な援助すら仰がなければならなかった。その当時、モンリオールからマニトバまで、汽車で数日はかかったと思われるその旅は、まさにロワにとって母親の喪を受けとめる通過儀礼の旅であった。母親の訃報に接した悲しみと混乱、さらに危篤を迅速に知らせてくれなかった兄弟たちに対する複雑な思いに揺れうごきながら、涙が堰を切ってあふれ出るまへの乾いた真空の瞬間のなかで、ロワは次のように述懐する。

こうして、1943年の6月のある夜に、オンタリオのとある森の途中で、私と母との奇妙な対話が始まったのであった。それはしかし、沈黙のなかで、あるいは逝ってしまった人にどこまでも追いつこうとする思いのなかで、私だけが一方的にその密やかな声に耳をかたむけ聞き届けるといふものであった。そしてその対話は、どちらかがこの世にありつづける限り続くのであった。なぜなら、人は自分自身の経験を経てはじめて、だれかを本当に理解することができるのだから。自分自身が病をわずらったときにはじめて、病をした人の苦しみが理解できるのであり、倦怠の苦痛をくぐってはじめて、その耐えられなさが身にしみるのである。

そして最後の孤独な瞬間は、我々自身が死に直面してはじめて理解されるのである。だからこそ、決して遅すぎることなどないのだ。逝ってしまった人に、どんなにその人のことを思っていたかを伝えたいと思うならば。その人生を理解し、気づかずにいた様ざまな思いを受けとめようとするならば<sup>16)</sup>。

ロワのこの述懐は、しかし、痛切な悔悛がにじみ出ているこの言葉は、同時にロワの自伝の本質をも言いあてているのではないであろうか。事実リカールは、このロワの述懐について次

のように指摘する。

・この「死者との対話」、母と娘とのたゆまざる和解の対話を、ある意味で作家は以後のすべての作品において追求していったのかもしれない<sup>17)</sup>。

ロワはまた『絶望と魅惑』においても、母親を思いやりながら次のように述べている。

・母はその当時、67か68になろうとしていた。今こうして、その当時の母親の年齢に近づいてはじめて、母のかぎりない悲哀が手に取るようにわかるのだった。しみじみと思うに、同じ年になってみなければ、その人の本当の気持ちなど分からないのではないだろうか。すぐそばにいながら、人は隣人の孤独を理解することなど決してできないのかも知れない<sup>18)</sup>。

いずれの言葉にも、「他者」との間に横たわる解消しがたい隔たりが諦念の思いすらにじませて言い表わされている。このようにロワにあっては、「他者」とのつながりは必然的に隔たりとズレをともなうものであった。

一方レヴィナスは、他者（隣人）との関係を、ディアクロニー（隔時性）という概念を用いて説明しようとする。

・隣人に対する私の遅れ、私の受苦が、私の内なる自同性の核を崩壊させる。・・・近さは共通の現在なき隔時性の隔たりを開く。この隔時性の隔たりにおいては、差異は取り戻すことのできない過去、想像しえない未来である。・・・

・隣人に近づけば近づくほど、私は隣人から遠ざかる。・・・接近とは共時化不可能な隔時性である<sup>19)</sup>。

レヴィナスの思想に関しては、ここでこれ以上立ち入ることはできないが、レヴィナスもまた、他者（隣人）との関係の基盤に、避けがたく存在するある種の隔たり、共時的な次元において必然的に生じてくる差異を見いだしているのである。

このように考えてくると、ロワの自伝とは、いわばこうした共通の現在を欠く「他者」につながるための「自伝」であるといえるのではないであろうか。



## V．倫理的，美的昇華物としての自伝

ロワの自伝は，従ってこれまでのいかなる自伝のパターンにもあてはまらない。ロワの自伝において重要な動機としてはたらいっているのは，「他者」に向かおうとする意志であり，その意味においていわば倫理的自伝と呼びうるものであるかもしれない。

一方，ロワを自伝に向かわせたものとして，アイデンティティの模索への欲求も無視できない要因である。この点に関しては別の機会にすでに詳しく論じたが<sup>20)</sup>，ロワは本当の意味の移民作家ではないものの，マントバの少数派であるフランス系に生まれ，英語とフランス語の両方をこなすバイリンガルな言語環境に育ったことは，ロワの生涯に決定的な影響を与え，ある種のアイデンティティの浮遊感を生んだことは疑いえないと思われる。例えば，自伝『絶望と魅惑』の冒頭が，疎外された少数派としてのアイデンティティへの目覚めと，自らにつきまとう異邦の感覚についての問いかけからはじまっているということは，極めて象徴的なことである。

私がこの国で一段低いとされている集団に属しているということを，はっきりと意識したのはいつの頃だっただろうか。それはいずれにせよ，母と私が幾度も繰り返した，レッドリバーにかかるプロヴァンシェー橋をわたる旅の途中ではなかったように思われる。この橋をわたって，私たちはフランス系の小さな町をあとにし，首都であるウィニペグへと入っていくのであった。そして私たちはこの都市に入るたびに，まるで外国にやってきたかのような印象しか持てなかった。この異国に入り込んだような感覚，私たちの街からごくわずかのところにありながら，まるで遙かかなたの世界にやってきたかのような気分は，子供心にはむしろ楽しいものでさえあった<sup>21)</sup>。

従って，ロワの自伝は，まぎれもなく20世紀のアイデンティティの構築を模索する新しい動きに属していると思われる。

しかし，ロワの自伝的作品をつらぬく最も際立った特徴は，すでに言及したように，「他者」に対する固有の倫理観を反映し，「他者」とのあいだに存在論的な隔たりを超えたつながりを追求し，欠落していた時をあがなおうとする試みにほかならない。時間の遡及によってしか可能ではない「他者」との隔たりをうめ，自己と他者との対話を実現する「自伝」という時空間は，ロワにとって必然的な帰結であったとすらいえるだろう。

さらに，追憶のなかに他者の姿をよみがえらせ，「他者」への悔悛にみちあふれた苦汁のようなロワの自伝は，端正な筆致によって冴えわたり，実証的なジャンルからは程遠い美的昇華物の域にまで高められている<sup>22)</sup>。

すでに述べたように，ロワはその自伝的な作品のうちに，異邦人や移民，疎外された少数派

の人々など、多くの「他者」を描き、その作品はモザイク国家カナダの縮図ともなりえている。それらの異邦人の姿は、ロワの作品において常に哀惜をもって描かれる母親の姿とともに独特の光彩を放っている。他者にひらかれた倫理的自伝文学が、多様な民族が共存する国カナダにおいて生まれたことは、あながち偶然ではないように思われる。

この覚え書きでは、これまでの自伝の諸問題に照らし合わせて、ロワの自伝の新しさと問題のありかを指摘するにとどまった。ここで大まかに述べた内容は、稿を改めさらに詳しい検討を行なうことにしたい。

#### 注

- 1) 一般に「倫理的」という言葉は、人道の規範に関する、あるいは道徳的などという意味に使われることが多いが、この場合後述するように、ロワの自伝的特質をあらわす言葉として、人との関わりを指し示すもう少し拡大した意味において用いている点をことわっておく必要があるだろう。
- 2) ガブリエル・ロワ (Gabrielle Roy) は、1909年カナダのマニトバ州のフランス系の町サン・ボンファスに生まれる。郷里で小学校の教師をした後、1938年ヨーロッパに留学。帰国後はケベック州モントリオールに住み1945年『つかの間の幸福』によって作家となる。デビュー作に代表されるような社会派の小説を経て、その後はマニトバを舞台にした自伝的な小説を数多く書く。十数編の小説、エッセイ、子供向けの作品を残す。自伝『絶望と魅惑』(1984)も有名。カナダ総督賞をはじめ数々の賞を受賞し、フランス系カナダ人としてはじめてフランスの権威ある文学賞の一つであるフェミナ賞も受賞。20世紀カナダを代表する最も重要な作家の一人。1983年没す。日本では、カナダ文学シリーズの一巻として拙訳『わが心の子らよ』*Ces enfants de ma vie* (彩流社, 1998) が翻訳されている。
- 3) François Ricard, <L'œuvre de Gabrielle Roy comme espace autobiographique> dans *Littératures autobiographiques de la francophonie*, Actes du colloque de Bordeaux 21,22 et 23 mai 1994, textes réunis et présentés par M.Mathieu, CELFA,1996, p.23.
- 4) *Ibid.*, p.24
- 5) Georges Gusdorf, <Conditions et limites de l'autobiographie>, in *Formen der Selbstdarstellung*, Berlin, Duncker und Humblot, 1956, pp.105-109.
- 6) Philippe Lejeune, *L'autobiographie en France*, Paris, Armand Colin, 1971, pp.49-56.
- 7) 石川美子『自伝の時間』中央公論社 1997 p.24-39.
- 8) この現象に関しては、拙論「ガブリエル・ロワにおける異邦 80年代以降のケベック文学の動きに照らして」『カナダ研究年報』15号, 1995, において詳しく論じた。
- 9) François Ricard, *Gabrielle Roy*, Montréal, Fides, 1975. p.95.
- 10) François Ricard, *op.cit.*, p.97.
- 11) Philippe Lejeune, *Le Pacte autobiographique*, Paris, Editions du Seuil, 1975
- 12) 拙論「ガブリエル・ロワにおける異邦 80年代以降のケベック文学の動きに照らして」『カナダ研究年報』15号, 1995, および、拙論「ロワにおける異邦人のフィギュール」『阪南論集, 人文自然科学編』第32巻4号, 1997を参照。

- 13) François Ricard, *Gabrielle Roy, une vie*, Montréal, Boréal, 1996, p.134.
- 15) Gabrielle Roy, *La Route d'Altamont*, Montréal, Boréal, 1992, p.156.
- 14) 英仏バイリンガルの環境で育ち、英語にも堪能であったロワは、しばしば英語で作品を発表することも考えたという。しかし「険しい岩間からほとばしり出る清流のように、わが心に溢れてきたのは、...祖先の言葉、自らの出自の言葉であるフランス語に他ならなかった。」 Gabrielle Roy, *La détresse et l'enchantement*, Boréal, 1988, p.392.
- 16) Gabrielle Roy, *Le Temps qui m'a manqué*, Montréal, Boréal, 1997, pp.25-26. 日本語訳は筆者による。
- 17) François Ricard, *op.cit.*, p.243.
- 18) Gabrielle Roy, *La détresse et l'enchantement*, Boréal, 1988, p.221
- 19) エマニュエル・レヴィナス 『存在の彼方へ』 合田正人訳, 講談社学術文庫, pp.223-224.
- 20) 拙論「ガブリエル・ロワにおける異邦 80年代以降のケベック文学の動きに照らして」『カナダ研究年報』15号, 1995を参照。
- 21) Gabrielle Roy, *La détresse et l'enchantement*, Boréal, 1988, p.11.
- 22) 例えば、ケベック文学研究者の一人G. ミショーは、ロワの自伝を *conversion esthétique* と評している。Ginette Michaud, <L'autobiographie comme conversion esthétique, les derniers écrits de G.Roy> Paris, *Littérature* No.113 Mars 1999.

( Keiko Sanada, 阪南大学助教授 )